



群馬県高崎市倉渚

◆写真中塚裕

◆文西澤健二

# 野の仏に

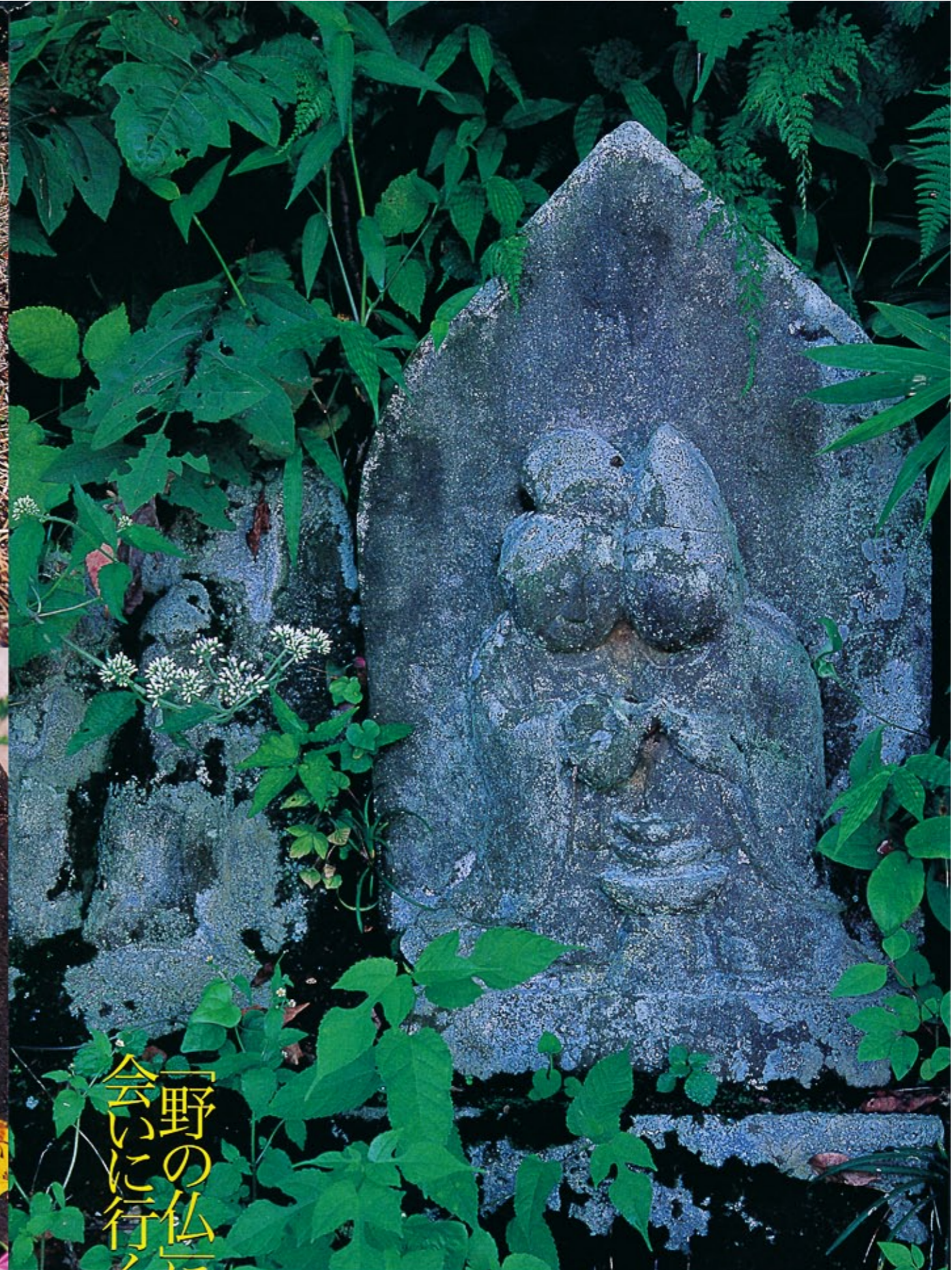
# 会いに行く

三ノ倉落台下の夫婦和合の抱擁像は、  
安産の神を祀る産泰神社の下にある。  
宝暦10年(1760)の銘が見える



写真上：江戸の昔から風雨にさらされながら、道祖神は国道ぞいの土手に百庚申さまと一緒に並んでいる。三ノ倉合上で

写真下：山林の中の道を上りつめた権田水有集落の朝の日差しを浴びる道祖神。碑の高さ約47㍍、像の高さは37㍍



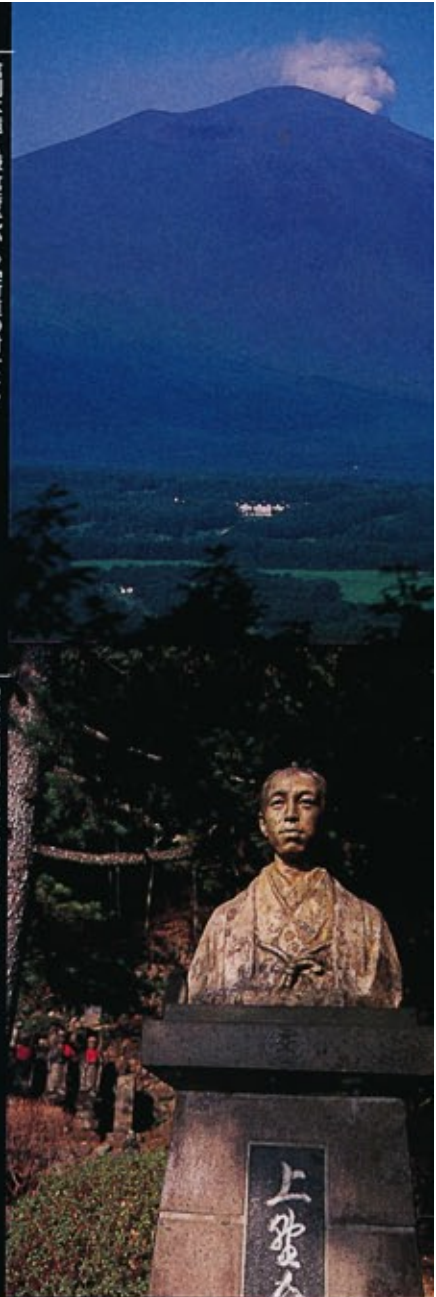
「野の仏に  
会いに行く」

権田・上ノ久保中集落にある仲睦まじい道祖神は文政七年(1824)の作。碑の高さは69㍍



倉湖は遠く鎌倉時代から「街道の村」として栄えた。軽井沢に抜ける長野県との県境、一度上峠から見た浅間山

「幕末開明の人」小栗上野介忠順は、ここ倉湖水沼川原で斬首され非業の死を遂げた。東善寺境内に墓がある



山の道を登っていくと、都会から農業をやりたくて移り住んだという若者が畑仕事を精を出していた



懐かしいふるさとの川を思い出させる鳥川は、鼻曲山(1655m)に源を発し、利根川に合流する

# 「野の仏」に会いに行く

が侵入するのを防ぐ魔除けとして、さらに広く五穀豊穡や子孫繁栄を託す神として、人びとの祈りを受け止めてきた。芭蕉は「奥の細道」への出立にあたり、「漂泊の思ひやます(中略)道祖神の招きにあひて取るものも手につかず……」と記したが、芭蕉にとつての道祖神は命を賭して旅する者の強い精神の象徴だった。今はもう、忘れられたかに思われる道祖神だが、静かに佇む野の仏との出会いを求め、地元だけでなく全国各地から、倉湖を訪れる人が増えているという。



道祖神の起源は縄文の陰陽の石塔にさかのぼる。その後は、旅に倒れた人びとを祀り、その祟りを避けるものとして、あるいは峠や村の境界にあつて悪霊邪気だろう。

高崎を出て榛名山と浅間山の間を北上すると「倉湖村」がある。平成18年に周辺の町と合併して倉湖町となった。町には7カ所、113体の道祖神が点在し、見どころのひとつとなっている。もともと道祖神は関東地方に集中し、関西ではほとんど見られない。関西の路の傍らに立つのはお地藏様。こちらは六道の辻で人びとを救護するという地藏菩薩信仰に基づく。関東では、より素朴な庶民の信仰が勝つたのだらう。